

## 第5回リンダウ・ノーベル賞受賞者会議(経済学関連分野)

所属機関・部局・職名: 東京工業大学大学院社会理工学研究科社会工学専攻・助教

氏名: 小笠原 浩太

---

1. ノーベル賞受賞者の講演を聴いて、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。[全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。]

受賞者に共通して印象的だったのは、経済学や統計学において標準とされている概念的枠組みにたいして、新しい枠組みを提示しようとする姿勢をもっていることであった。例えば、計量経済学における離散的選択理論の研究においてノーベル賞を受賞した Daniel L. McFadden 教授は、経済理論の基礎となる効用という考え方にたいして疑問を呈し、社会学、認知心理学、脳科学といった分野での成果を援用することにより、経済主体の選択行動をより正確に把握できる可能性について論じた。また、計量経済学に関するパネル・ディスカッションのなかで Christopher A. Sims 教授は、近年利用の可能性が高まりつつあるビッグ・データを利用する際に直面するような、複雑な統計モデルにたいしては、Bayes 統計学に基づく推論が有用となる可能性を示唆した。既存の枠組みにとらわれず、学問の発展に寄与する新たな手段についての洞察を深める姿勢からは、多くを学ぶ必要があると感じた。

2. ノーベル賞受賞者とのディスカッション、インフォーマルな交流(食事、休憩時間やボート・トリップ等での交流)の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。[全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名(3名程度)を挙げ、記載してください。]

ディスカッションでは、様々な質問にたいして、ひとつひとつ丁寧に回答する受賞者の姿が印象的であった。質問の意図を的確に汲み取った上で、わかりやすい表現を選びながら、ゆっくりと答える。それにより、参加者と問題意識を共有しようとする姿勢がはっきりとしていた。また、インフォーマルな席では、Daniel L. McFadden 教授からお話を伺うことができた。その中で、特に印象に残っているコメントは、着実に研究を進めることの重要性である。粘り強い学習と対象への深い洞察という、研究における基本的な態度の重要性を、改めて認識することができた。

3. 諸外国の参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように活かしていきたいか。

参加者の国籍と専門分野は多様であり、講演やパネル・ディスカッションにたいするコメントだけでなく、研究のスタイルやキャリアについても、様々な意見を聞くことができた。また、各国中央銀行からの参加も多く、現場において用いられている具体的な分析手法を知ることができたのも、大きな収穫であったと言える。本会議を通じて得られた人的つながりを大切にして、研究活動の範囲を広げたいと考えている。

4. 日本からの参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように活かしていきたいか。

日本からの参加者は、それぞれ経済学のなかで異なる分野を専攻しており、それゆえ講演にたいするコメントにも多様性があった。また、個々の研究内容にとどまらず、各々が専攻する分野における研究の動向や分析手法の進歩等にも話が及び、学ぶことが多く有意義であった。諸外国からの参加者と同様に、ここで得られた人的つながりを大切にして、研究活動の範囲を広げたいと考えている。

5. その他に、リンダウ会議への参加を通して得られた研究活動におけるメリット、具体的な研究交流の展望がもてた場合にはその予定等を記載すること。

6. リンダウ会議への参加を通して得られた以上の成果を今後どのように日本国内に還元できると思うか。

後進の研究者にたいして、派遣事業そのものを有意義な機会として紹介すること。

7. 今後、リンダウ会議に参加を希望する者へのアドバイスやメッセージがあれば記載すること。